十訓抄

前厨議の人の事上

九

第十　可席秀才

或人云、本より其道に乃家に生れわきまへ乃事也、さる
さ数も稽古よりて行はれ、学べき也、中にも氏を
うゑたる者、藝をうゑして氏をはげむ数あり、道にあり
さる数、結ぶよりて成りいたる徳もあれば氏をはげんがため
道よりてこんがらあり、彼れ是れ、もげしべし、何ぞ
わきまへいたるわいらのまじらざれども藝能
行く先おさしたてらわるに我ごちのあそびうこよぬ
さいぶく何事をもたてこんいに雲泥乃心地して人目いと
しくこそわべしすべく身をもうるもれば、あやまきが

宮城傳平家書

紙あるに之をかく成折いとのふとあるとうれしびとひさ
ふくるものなりあるに人に死れあるうのうたいまいうらうあ
さるとなくいかうとれども春の日うぐれ暮れあるしるる
はるみどりと計ぬくそうるれ白いとぬぐぬぐしぬ
とれば桃李は一旦の栄花なり松樹は千年に真木なりと
いろいろみくくあるそこの紙なれが一人あるに紙ふるぐに紙
あるに紙ぬるなしいとやや紙よりの折のまぐ先
をや何現や因縁なるぐ一人に紙あるれと一人に紙あるれと
やや中にも世中のうるるあるこはもしまいに沈没れぬるく
りまに分くに道の才芸もまた文祖よいとぐれたるし

をれば蓋ふるも青めんてい海てんに帯也とうてぐも物形
なりとも笠裏の業紙はぐばんに口揃うあぐし
一 中納言大夫門脇伊陸ないこ品中務の兼明親王の孫
なり村上の御時に仕る雨主上作に秘くこ叙官い
常に何事をうさ秘し伊陸うさだのういぐるとうや
ト物をこて常にあてあそびし作るしうれとうされ帝をび
宮に作るうきこうん一見せぐ作るあるとやくれ
とく後日に封付うに文を一巻りて書秘うを上裏
なぐふとて世ぐしうけるふこ文をひうこて中絶ぐけるふ
君脊に詠へうる三百千題へうるあうに文盲の間これを

そうべ百おそうそうをはる才藝の人れまたもうふ人れた
いし浮そう莞爾賦しそうの紙ぐたも和歌いざうけるうや
(二) 菅三品長 菅補昭宇多院の義人まる補して試のうちは陽孔遥勸
酒として詩紙賦して補昭をして序者しす叢窗乃助成
をうぐいて院門をうぐて結文をうべ件の序は自孫
句云

旅ニ於 春門之一波ニ 二年 朝恩未タ及バ
端テニ 於 蓮一壺之雲ヲ 十一日ニ 夜一飲 已ニ酣
しぞうまる人日之紙秀者しん又乃文時に端者春之雲
一日と書べし指と祈くいそ人るわうれく雅じまる

餘の事紀祖業とはぎ事彼伊法ハ仏ぎ名
(三) 清堂関白 兼家の三男 大井川にて紅葉の時詩哥の和と分て名徳
紀氏人とのをり紀名ふ四条大納言紙作りをてをいばを
のあしのくべくつ公任ゑ和哥れあしのうぐさをの
をくうちく

わまをこ紅葉のこれをけをハ紅葉の綿をそれ人をあ
ほをいをれるいいばとれあしのうぐさぐや作り紀しを
公ををうをを紀うを詩乃あしをく思ひの結を紀り
ををいび名いあまて海とれ梅をを紀名り此哥花を院
拾遺集を探ををあ所紅葉の紀をうをく入ぐれを

作れる紙をうぐうざ法ようりされ名をバ年はまくに
入ををうを入園融院清所大井川道をれをれを三毎り系
をもあり
(四) 帥民部卿経信卿の入此人を世ををぢを名り白河院西
川より参所詩哥管絃のをのあを法くく其乃をくの
人ををあてのをり紀名れ経信卿を歌の所をのあに
清堂をあをうぢり紀をうをばうまをれて系ををを
けをぐ三年を歌る人をを行ををぢ法つれてやをどの
あにをまれをを世れをくといをれをうけり所を所をくをを
をををうあくいをを歌料を歌をを紀名れををれをく

爰徒の無に帰して行奇と称ぜられるもこれ乃毎
年ふるとハ是なり

五 後と修院行者社より清書のものを府徒行て序代り
なるべし名り真奇に

沖津風吹よりしの行者乃れのこうえをあふ名浪
高度の奇也能ふ様ハ後れ湘長紙よりいく枝ゆる
古今に行ふ躬恒が奇に行者の れと秋風吹うに夢
うちうふ沖はまて浪此徒大長れ大資さん日奇石
徒乃沖はなの中門の内よ入く史生の饗りはさ
なんゆて後れ云此作ふく彼奇金とうふ無而

古今の奇ふうにより先徒大長いんよ此作い
一乃大納言て兵衛ふて南海より移ふのがりて射礼
ふ居なんにさを為ふくこ云ちくいさもかりもんやいで宵
べきて感氣有もう又自讃之形恒の集奇多ふ中
あも れを秋風のうけ乃ふい事ふけふ湖人の帽乃帽
よちふ乃八聖堂と中ふし此檀の編息とうて詩
を楽び嘯ふて脚ふ也ふて
あいふうひはべうい紙沖はの風の奇ふをあれていふ徒
ふう人此身ふい一徒の徒ふうぶかりぶふる此人ふ
上古にもふる英才也故徒此徒ふ行ふ

(六) 都良香竹生島に参りける時詩を作りすてゝ

三千世界眼前盡

ゆいて白紙作りて其上に寂び得ざりけるに靈天地室と下て

十二因縁心裏空

一句なくして法華の同人羅城門をくぐりて

氣霧風流新柳髮

と詠じ給うて社の樓上に参りあるとて

氷消浪洗舊苔鬚

ゆしはもとより良香菅丞相の作なれども此詩を自讃

しゝかもとい下のゐい鬼の詞なりとぞ作りとゝる

(七) 世中に名ゐつゝ世をうとくなるは蓮の花と伝教

の花よりへなるべし報ず勝れ行くいんする事也

ちなに其中の旦人と世がゝ赤人を隴と雲晴とゆいる

い世家をぞいつでう情なるべきとて赤人の

美をうたてこうなるまさてそのあ中にあるめ下人をむ

まで作ぐなるを彼るい清性之乃大将を褒し

ゆいなる内の表の文也

隴山雲晴季將軍之在家頼水浪閑

蔡征虜之赤仕

(八) 江都督(匡房 三衛四代成衡子)安樂寺にて曲水宴行はれるに自序と書

真一句ヲ云

竟女廟荒春竹深三掬之淚徐君墓古

秋松懸三尺之霜

(九) 近い建保乃比叡の長貞宇佐の勅使として下向の時

安樂寺に詣て作文ハ造をのぐる自序と書ける

青雲入手遥持使節於百萬里之西

玄風染心泛拜祖廟於十二代之後

此句紙詠吟乃間文人よつて作る祠官等涙を拭

ふ神も定て御受ゆるしまんよう

(十) 後因入道信孫寺實綱(日野三位資成子)住いて彼國よりぐるとう

けるふ夏和日いさくてるてて民の歌あるべしとなり

神い和ゆにそ行ふ和ゆにそ行ふ

を國司ちくりにとめうれば

天河黄代水とそ記ふをあらうまれ神ゆは神

とあるとみくぐに書て社頭紙にて上させられ

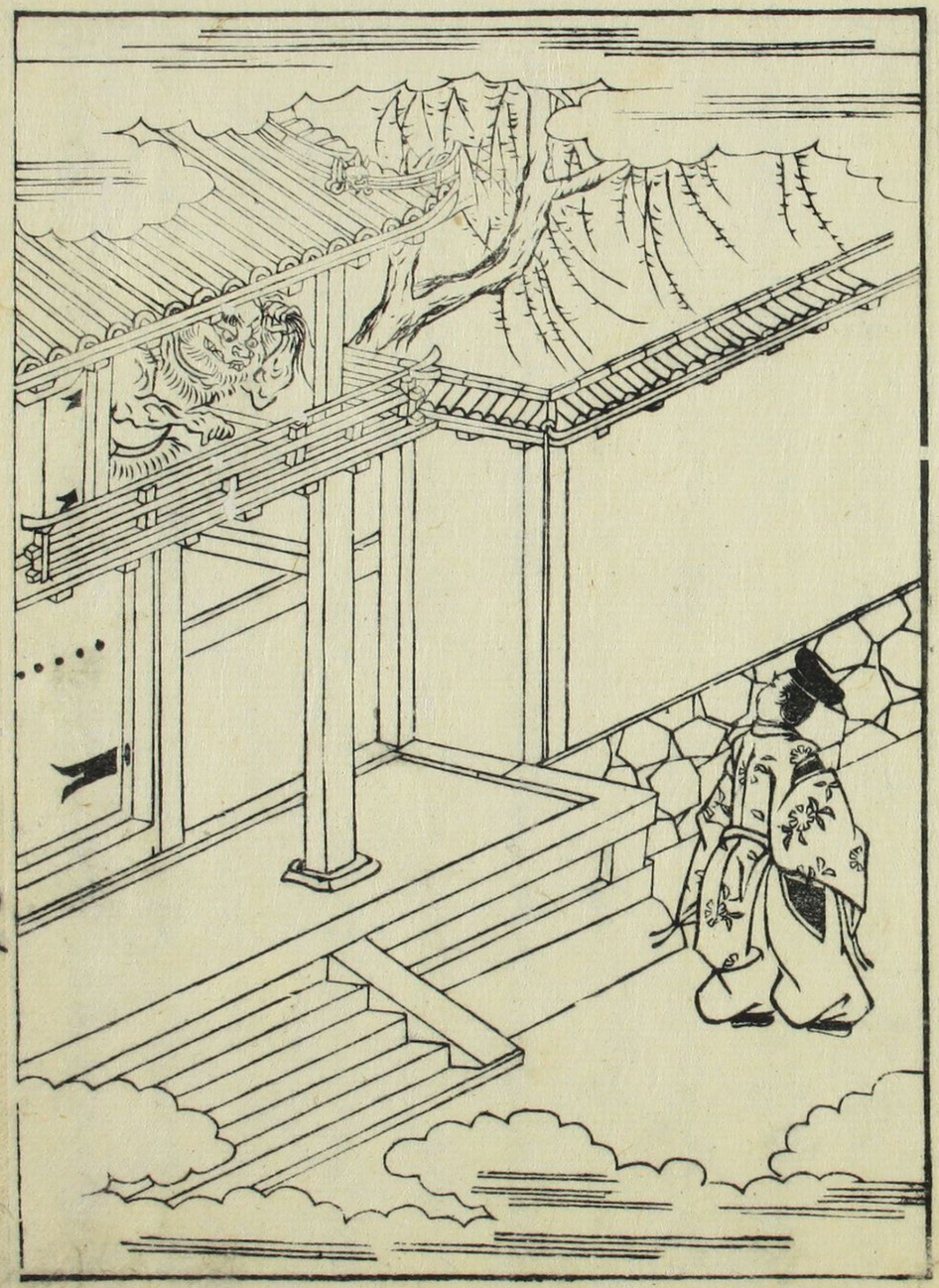
ば炎旱ハ天ゆるにくりて大なる雨降て枯る

稻苗をうるくえぐりふるぐうう天災とやつ

ぐう年唐乃貞觀の大宗の皇とのうし臥ゆをく

らぐうう後因いをれうすきの也

都とい震と立て物ゆ分ゆ如く白川乃関



いとうけるに都よりのぼり此寺に出さん会とひ
き人まもなくれどいさくさるをあそこに成るく日う
あづかりてはるかのくれ方へ俳諧のつめぞたよみうふと
ぞ拙者しける

十一 侍賢門院女房加賀とうたよ寄のこゝろをる歌をんとい
ふてうたよりとよりてよりうたよりをう
こゝろ寄と年ぢまくれわるに成ぬ歌
人うしいしまてつきてんよりてこゝ集ちどん
いとんやりてし係るべしと思いてうぐちてうん花園
のれくぐにり初てぐう思のだくうやりをん此寺とまう

をうらうらしいはやぐもいみしくあそれよはやがりうらはてうひぐ
ちく千載集よ入よりうせ人ぬ榮の加賀くとぞとりまる
紅葉ぐうらもしいみ仰うそ流うり

十二 中はるの頃めをとうら女房世中をえぐもうらうらぐうらあ
うらうよりとうる姫松ちん おうりけうぐナセハぐうあり
うれいぐ星松いうあて月やとたさ海うきんくさてがのる
しさこハ情う姫君とうやたなくくまうて紅梅侍系
うて舟い人いいうふていうやん世女とを世とたさ海うて
うを紅くくすぐとうて新歌さくくけうふ世むうあ
まはくうう毋うひぐ松梅あて紀くあぐぐ祝うを

まはあうさがうん海て毋ぐ世をいうぐうを世しいてうるを
どををうううまはうを秋世うん紅梅神もあうれよ出
石けうう紅ぐうたいを年うぐぐふ祝まううを作うと
人ぐう秋て姫君世ぐうをそうるあう海ようあうくていう
ひく

舟のうを松中くを何をいを水世をうを松うみくあうん
とうみううれいぐ毋をそぐうくて物をいをぐうて下向
うるふ七宗朱雀のうをうあて世世に河うたを人殿上
人うをうをうあをぐて帰ぐうを世世女松うて東にの也
うやうを北の方あうて姫紅をうん紅うをうう

十三 和泉式部が男のうまごにあたる貴船の宮の神官

けうふかくうの泉式部

物語人に見せ給へる社の門なる

ひたぶる歌社の門なる

きうえもう

おくにいまぎうて滝の流れたるを教へうの物語

その所にあるとうたを

十四 同式部がむまごあふ式部卿の宮

うぐいすに鳴く人ぶかしもとねぐふなりて明

くれば和泉守の側よりいそいで源中納

同式部がうまごあつまて母がのもとにはくくとうていさの

ちうさに

いろふかいくへき方も物ものとおもはれうたと知ひ

おくまの紅さうあるていまれば天神のよりあらいさ

てやあんのぢゆうあるてのあれこいてうち

ちうく所のあうさまにはくくよろしく御よろう

十五 江華園 和泉の任さうてはは 大隅守時茂女 福重うとうの行吉の

さうあうよりと知く其母 赤染衛門

うらうていのう命に惜うて物と新きんてうてさ

とうみくうてぐに書て彼社うきうればうの歌

是より面髮玄義宮て此幣と成てみくに病念ね

(十六) 鳥羽法皇の女房小大進といふ方あるまゐ侍ら
侍賢門院の御衣一重失ふ紙ゆいて小陽の給ふ
ふくに書て祈るまゐふ三百こいつよ神水と申こゝ
ろうれば寺検非遣使見てる失やすべき出給
いとゝける紙小大進なくゝゆりやきのゆり私く
ゆいうれなう今三日ゆいうあ紙ゝべう神よ志ゆうゆくい
紙と具し出ゝ人祈ゆ申ゝと人祈ゆ申ゝとゝ
つゝゝゝ女房のうちなくゝゆきれば検非遣使ゝあ
ゝれうゝらそのゝうゝ紙ゝ小大進

思いいらやなる所いうゆきわゝ人神よ成ゝ貴紙
ゆゝよみくゝのゝすゆゝ一まゝうゝて御寶殿にをゝゝう
けゝ夜鳥羽法皇ゆ御夢ゝ御給ゝ御給ゝふまゝふく
ゆんゝゝれゝ嘉東寺にて御祈よ之て中ゝ中ゝゝゝ
ゝゝゝて我い北野の右近ゝ馬場の神ゝて行ゝゝゝ
ゝゝの行ゝ市使行ゝて人をゝいんゝゝ行ゝゝゝて
ゝゝゝゝゝ天神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
者ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
小大進い雨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

に書くる所とるんて是紙百く寸ばかりいまだ
あるさなり鳥羽殿南殿のおよ彼失ぬる法衣とりづき
てさんとやは師まいちう紙ぐちにて侍賢門院
ぬげるしなるをけるぶのづきて師まにまいてまてうこそ
天祈ぬのくに奇れちでさ坊ぢうけるあとめぐでくに仕を
即小大進をにあ秋ぐもかるんうとは事い仏を
ろさるのよ坊がしめさ形のあれいちにとやぐて
仁和寺ちる布ろ篭兵ようかをいまだして天地
をうぐのー月ようろ長巻ともあくれとふつとく右
今ぬ序ぬうれういうれくの数ちうかゆるあるさ

あれぐちのくあれい耳ちうれぐうとちうん
十七 成通卿曲よすぐれ多くうきうめのれ坊ろんちを
ちんいさんく炉いてさうる人さ験者ぐもれくかひうる
う世人ぐうひよれくうける紙みく君ぐんも今ゆう
あそぐさバ坊ちいなんとりるふやすさちふこそ組
坊ちぐい人れぐ原ーのうんいさうれうを年高く
仕る所あれいもーのくて死いも後世乃ぐうくまや仏
とり市ぐいさんぐなういーて
薬師十二代松殿い飛病悪除ーそのすーき一経
具耳いさそさんうう皆今法ぐうさぐうど

ゆて七夕ぐりこゝい給ふるけきをハめのく涙となりて川く
かぞふれ人を秋中しかいまうくばもあるべき縁あり
らそくあいて作なべく浮ゐるかぞふおこゝる河邊てから
よるり是ハ和哥にある様ども来ゆく同車まるや
(十八)浄御原天皇吉野川の邊に御遊して琴を弾じ玉ふ
に神女是にめでゝあまくだりて舞たり其曲五度是
を五節とゝなづけて豊明の節會にて年々不断今におこ
なはるゝ舞姫といふハ彼神女なぞらへてあるなり舞姫の附
の事
乙女子をとめさびすもからだまもとをもりんれさて乙女さびせども

をとめハ未通女とかきてまだけがされぬ処女をいふなりこゝが
神の宮出と吉野山雲を是とすり
(十九)村上帝ありし夜清涼殿のよれ琵琶を弾じて水牛の角
の撥にて玄象を引玉ひて其音一声せんとし給ふに
紙のおぼくなる者空より飛来て孫廂に居てうたひけり何
者ぞと問給ふに大唐の琵琶の博士あざな劉次郎廉
承武なる者今此空に在て此琵琶の撥音の
いみじさにきたる也やそくハ貞敏に授し曲にいくる
を授奉らんといひて上玄石象の三曲を弾じて琵琶を
指つかひ給ひけれバ是ハ廉承武が琵琶に仍る

義和遣唐使大唐開成三年九月七日於
揚州開元寺北水館逢沈巴琵琶博士廉承武ハ劉次郎年八十五受習廉承武為判官従三位刑部卿從彦子参議
後三條次成錄

貞敏よそびいし秘事れ門ろ伝ろ水ど々ろ後夜内話後
中て上玄石上れ曲笛授ち与ろ々ろ柿西宮左大臣月の夜
琵琶を引ひろろ小廉姫武が霊来く小ぬ与分て姫ろ
を授ふよ〜ど伝ろ後ろ恋霊二てび来伝ろ現ぶろろ
宗頼中納言は華経とよろ見ろて独居ろ所ろ
陽明仏人の来れる事似ろ

(三十) 惜雅三位月のあろと々ろ夜真衣ろて朱雀門の前水
あろびて後夜笛笛吹きけろ小同拍ろ西衣ろ々ろ人乃
笛吹ろれば後人ぬんとろろ其の笛の音世ぬ与ぐ
ひちくめぐ〜関え来きびあ中ろて迎ろて見々後ば

いまぞ人なりそを我も物いとだに絶もいふ事なし
かくれおくる月の夜ごとに行めぐりて吹ゐて吹ゐ彼人の
笛の音たえたりでさうとうれば試りうれをとりて吹
ゐれば世にたぐひなき笛也そのうち牧こ月はなれどゆき
あいて吹ゐれども幸れ笛紙ゑしてうんたいとだり市絶ば
なぐくうえてゆきたりうこ位先こ後帝此笛紙石て時の
笛吹どもにふりせらるれども其音紙吹あつと人なりうり
そのうち浄藏といふ人ぞこの笛吹ゐをうて吹ゐ絶ば
うり彼こ位よをうざるとうれば帝浄藏ゆて此笛は
を朱雀門の色にて掛こうけゐてこそきけ浄藏此笛

うり絶て物市こ作こ絶ればうれの夜作のおこうれかしこ
よ行ゐ此笛紙吹ゐるふ彼門の樓上に高く大なる音
にて遠物うれくあるゐうり紙ゐくゆて参しけもばけりて
見の笛こ志ゐ先きり葉二こゐ付て天下第一の笛
ゐうこのうち作こて清堂入道殿の清物うゐ成ゐうり紙
ゐ清平宮院こ遣こを清ゐうり絶藏よ納られゐうり此
笛よ葉二ゐり一い赤く一い青くして物毎うり変ゐこと云
けこ人これば京極殿清綱じけうり紙い赤葉落くけゐを
ゐざこゐうゐ笛家入道殿うこを絶ゐうこで笛にい皇帝
圓礼將師子荒序是紙四秘曲こいふうまこに世こ絶秘

とゝ万代萬秋楽は五六歩也爾の家祖は青葉葉二大
水龍小水龍野焼雲大九是は也名にしよて各由緒有
といへども長々れば略す
(廿一) 八幡打楽人元亟當官領伊予國吉河保二条以北下
向して上洛乃間種々の泊にて白拍遠孔雀片鬢雪
乃ごとく美奇異乃思紙なして巫女に化ん所吉俗文
託宣し給て云適當國小下向其曲紙きらざるにより多
紫つ紙ゆゑと所也忽ち押序て彼社に参て宮寄に
下の秘曲を吹間白髪白髪ありしもこゝ也道の眉
目といへべし

(廿二) 備中守政長が神拝よりぐ々ろ何は則吉凶資何資
なくいへ何の拝れよりぐ紙つぎなしに下ぐ々ろ人吉俗
津ゑの浮ゑて則高陸紙拝々何ゑ宮殿大
ゆゑ々ひ出きて出びゑ出ゑ出ゑ出ゑ出ゑ出ゑ出ゑ集ゑる
者ども拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ紙ゑ資何資拝ゑ拝ゑ拝ゑ
ゑ拝ゑ拝ゑ則高が拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ
宮殿出きゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ
ひとゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ
宮殿に向ひて浅く彩ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ
ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ拝ゑ

(廿三) 如音院大長殿尾張國より松くゝ海けゝ付給く奏聞
宮より宗法師まゐる七日滿ぬる夜月のくゝ海なりるとくゝふ
経題をしるしまゐて新い人くゝ生世俗文字業しつゝ朗詠
をしたゝめけまゝび寶殿拝びくゝもくゆゝだくゝ世乃未
をれども道乃極わまゝびいくゝぐめでくゝれ事也
(廿四) 建仁乃比天王寺に人くゝまゐりくゝる所舍利の出さゝ給
いゝ事者きゝ羅の人なりて世こ人をのあぐゝても
報おさゝ給はざゝとくゝ寺僧の中に者くゝる人はゝくゝ
此中に給ある人やれつくゝまゐりべめくゝいくゝるとと
いつゝ中將宗通とゝまえしゝ人ぐゝとくゝひまゐりきれば

舍利出さゝ給よくゝ天の岩戸をあけ事も思
出くゝ給ゝつゝみくゝるときくゝ
(廿五) 南都に舞の師わざふ和物全晴遠といふ者あくゝ
寺代にて三殿樂紙舞よ者たつくゝ陵つくゝ給どゝ
此舞いまゞ人よ教ざゝける者くゝ病付て失たくゝ生
用乃比をくゝれば彼病と桂素の事にをきくゝるさ
さ二三日ありて其者紙未こくゝるゝ物のうゝく音ゝ
ちけまゞ中くゝ彼葬家に告くゝれば妻子親類
ゝるくゝふいきくゝるくゝれば家よ奥して未く潮よ
をくゝひくゝ行牙に人ちくゝ出未にまゝ

諸〻の云ふ炎魔王宮にまゐて罪を定めて後に閻一人は冥官の
中に日本の舞の師晴遠いまだ還城樂紙作を教へられ
其身を召しかゝる人々を召遣して舞を作えしめさせて召
まゐらせ給へ人々各議して実にもとゝ
見人々の常樂會の舞仕れて返さるゝ
まゐらせと語る云々此者ども仕くめる
さるれる事とゝいかゝるの此舞と茅子に作え給
ゆゝ失たゝる茅子をば上府は季宣るべいひろ此
晴遠が先祖の舞人は家よ是樂乃面あまさ者
ふる物をもて身代を代是紙作えてゝ今南

都の宝物にて有るゝ人の彼王宮にも此紙を
作るあるべし

(廿六) 怜人馳元府役物色の事はよりて左近府の下舎
召給らる此下舎よい蛇蝎のごとしなる物紙とゆそれを
なりとところよ夜中ごろに大蛇出れ出ずくまれり頭へ
紙屋の獅子に似たる眼いろるもりけれくにて三尺斗なる
吾ち出ずく大口紙あれて沒しのまんに助元さるしい
失るごとくなるく腰なる角紙わさおーを掘乃
破と吹大蛇来りて伸て頭とそくもてげてちづ
く角紙屋きして返るを去にり

(七七) 和泉部の用売しいて樂人方をう土たの浮舟遊り
くぐりて上々ろに安藝國なるめで汐して海賊押よせ
ふるとくろう矢ぶ行恵ちくに孫ば防戦ふよ力をて今い戦
なくころされるんとおいて軍業紙取出て屋ちこのとり
かてあの黨や今いたくに及びだとぞ何物とも取ちあ人
但年ごろ神ものいちめうら無軍業乃小調子と云曲吹てき
うセドさん防ち事こて方ちかてはの物ぐうにも志給
へしいい市れば家伝の者大なる数とてうまきたぐ行
うべかく云事也物さけといひうれば舟紙おさんてとの
ぐまうくこうた用え今いい限とえてけとば涙とおど

うでこれ音と吹出ふれとあちこうろう形ちくわ真調
涙のとたびぐきて彼湯汐にのかうに琴琵とあまーしに
詰ふとれば海賊ちづまりていつるぶ終ぶて曲
形うて先乃こ名うて者ぐ舟ぶ紙うけてしせてうつま
ぐも曲の数ち涙落てうさうわとて漕出ぬさうけき
ふの敵ぬ紙ちぐさしろ事和ちよい張ぐこ形う
皆管絃乃徳ちう又冊ふい鬼林の不感よあうざれ
ぐも命とかさくう事厳重にうよ沈ふたう

(八八) 天暦乃ち御時延元ん弟人既して出ぬえてこうてお
いまうかてはれ乱也に遠ふもなくてる結いろれ歳付

敵慮の公よりこれをせしに是て市にいたりて紙を
しろ紙五方をしばいそぶをもつかれども
さのみてるとはなるを口惜事い藤魚雅材と云学生術
しるべをいとわるこのるべうけ紙奏せざりけることをいと
強うしかと作りまさまきばり理り沿ゆ中ゆて義人しろ
べさよう作下されしろ紙小金舎人して鯛遣をしに家と
尋ねしく通面を同あく去ろうろ雅材出仕をべき
やうもなりをけ紙君同て内義自ゆ作ゆく其つをそ
ゆいと行りをろ彼が書ろ白い鶴鳴九皐に序也

望廻翔於蓬鴻震被未達思控御於茅山

霜毛 後ニ老タリ

㊀ 同清写 長門守長盛子 楊直韓ヲ民部大輔とらせけるを文をい
自書て小野道風に清書せさせくらゐ上侍賢ざゝ枝き
ふり

依レ人而事レ異雖レ似レ偏頗ニ代レ天而授レ官誠ニ

なを述懐の詞を書すぐさせたんて侍乳母あるを
くらゐ人是と恐思ふ處てうのち内裏燈花儀中淀へ
あナせさを給いさうに代くれ侍後物傷子時の簡云
象終麻いとものてまいりて直韓ト文い取あ

ようやゆを侍身をたれば時の人いみゝき事にぞうける

㊂ 東三条関白第 兼家 大炊殿 長女 長女 長陵殿 大炊九月十三夜の月はいとあれて
東小院の念仏よ来給うけるに荻おもく世中を
きづつなるなぐ小前信民部仏を免てあるいをぶれ
いいぐやもん朗詠中に作り枝名れべいて畏て時
まづ乳母なる人に耳と時ているる句をうり詠
ぎんずんと侍なぐ小枝乃そ紙金ぐる事一夜と
折おしをうける歌なぐめぐうくり此句書る前
名ゆゑて侍供よいくり我句をしぐうれ人の朗詠
をう秋うるいるぐるを乃の中をじるるもん此句

ハ勸学會乃時構念仏林を賦とる序也

念極樂之尊一夜山月正圓先旬曲之會

三朝洞花欲落

是ハ三月十五夜事也九月十三夜ハ詠ぜられるいぐ

とやがゆ但念佛の議ぞうに成よれるけるや古人

乃所作作而可信也

一條院内裏前栽花園わさとうける紙原圓寂房為時

共りをもとる小清堂殿とるとやされるるや圓寂紙

みされなけるとる時然よとどり文を女房に付て寄

つとる其詞云

若学冬夜紅涙盈巾除目春朝蒼天在眼

帝清覽で供清もはいるべ夜の中ぐに入を給て清仏

労有じる紙清堂殿の事給て圓寂紙設てる時とる

さしりきり

(卅)後三条天皇清学或武士伊勢前宮寮の中ふて

紙を射るとよりて左衛宮より仰ぐて奏聞ハ乃ぶ

間仗議有きり隆綱宰相隆家て筆を取く定文を書

其詞云

雖有飲羽之号未見首丘之實

わ〻有とよりて中将をゆるされて筆字を給り後とり

其時の番議申ねがいたてまつれば行れなるべし

(廿二) 法性寺殿(忠通)白河東北院領池田荘解と朝臣々執奏の

べき所々さたなり其状之中に

非常輕殿下之御威兼又成梁上之奸濫

と書べき紙に賢ぐて此解状い田舎ものの草にあらざ

学生儒者ならの書べきこと尋よと仰べ給れば荘

官ホ石尋べ新ホ勢い秘蔵して下さるべ殿下出家

ちゝて同者まゝ江外記康貞と者よ縁り給れて

誂て作と申べきこと仰よって康貞と文殿よ石べ

べき此ホ文章に付べき面目也

(廿三) 頼政(兵庫頭仲正子)と伝い多田満仲(六孫王経基子)が末にて武蔵其氏と継ぐ也

いづれも和歌好浦波之とそれさるもべいさく大内守護

して当ものべ雲の掃とにたるものこと身をくべる事のみげ

のべく尚べ

人をれば大内山の山もいまはたゞこの月ばかりぞすめる

やゝ衰へて昇殿ゆるされ申べ

三井寺覚讃僧正年高なりて方織とゆるされざる

けるべ継ぐ歌よ詠べ

山川のあらそひかねて流べは法を招べのみとや法さん

鳥羽院頃べ阿闍梨覚べ何べ

顕昭法師綱乃望申けるに

[illegible]

かくとよんでくだされたる人は法橋にてぞ

信定法眼（法橋光盛の門人補忠定孫）

ひさしからぬ人の命をのばせ中無ちとにはのさてさそまろ

やどりつける紙西園寺入道相国のゆすりふきりくれば法下

ふりかさねみくり

但馬守家長栗田宮奇合よ寄ふ人といふるものを

三田ふくれるあるすず衣紙乃雫いあるらしもれし

とよんでくだされたる五品乃一階をくらまくる

世 別當入道惟方ハ二條院乃御乳母なりて世ゝ重く

内えまゐりあく振舞てはは白川院の御いとをしみ深ゝ

きれば出家して能ゝ世をもしるまに[illegible]

さ秋しくゆるされ[illegible]ども身一いなれらひがゝ紙由

を作まて

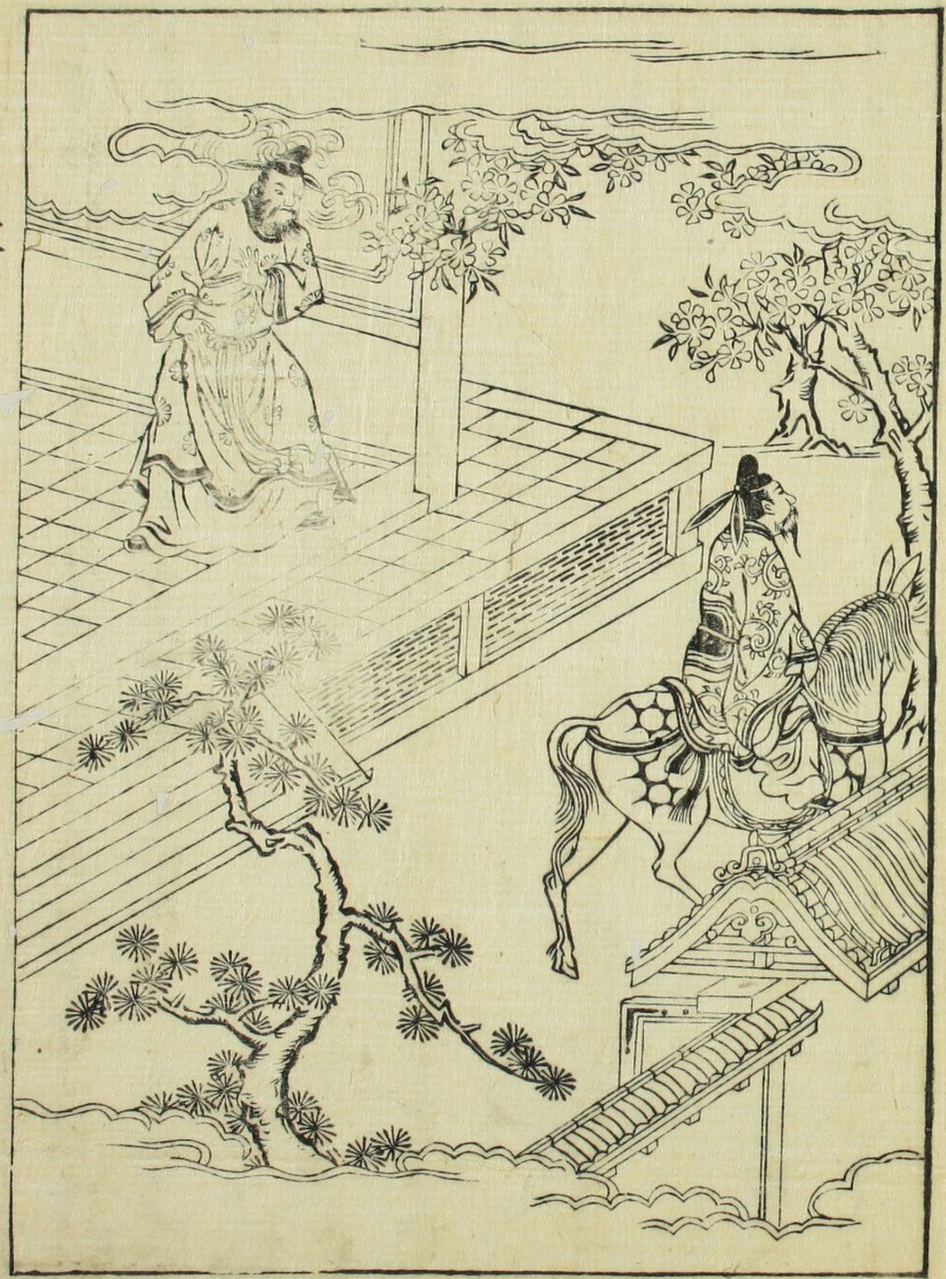
世世[illegible]院ゆゝ多い淀川なる秋しよりもあるて神武

やよりんて故ゝ[illegible]ゝ紙はなるはゝ内ゝ[illegible]仏

やよりきんけも重く秋ゝ[illegible]

つて[illegible]ゝ[illegible]

（西園寺公経法名）後鳥羽院御定家に殿上人をそれてけるはいるゝ



うう勅諚により入ちゅう秩ちゅうをけうぐあうこうこはよらいきる
ゐ事もむれうく業にくれば又後成之位此事とをげうて
ひくうとうて徽事ゐ法事ゐこうをくう
わうこんれを井に迷ゐ事ゐられて震どうこんや海こんゐへ炎
徽事此事と奏聞をこうれば紙ゐ沙感ゐて定長朝
臣よ作ゐく市返事あり
ゆうこんゐを紙ゐて帰ゐ地ゐくゐ大をけうこうて乳色ゐ
やうて厨上れ出仕ゆうされよゐくう
天暦伊女市ゐ九ゐ年厨市女 選子内親王
大斎院と戸宮乃沙市の内ゐ女房れ物戸さんこて御人
徽市寺ゐ附ゐ 兼備猿 栄式戸足毋務侍寺ゐ信女
惟紀ゐ毋ゐく事ゐうくゐ紙侍ぐ元付てゐゆきちいくうれ

かくれて消えもいとげう寺社の門をけてこぞうくるる

神ふれの木九級ぬあり孫たちのうとされい人くるうくう

とよるとるる紙彼身くるく女房院よりくれいゆるさはくう

白樂天ある年春暮煙霞乃興うしうれてあくがれお

くうけるふ所おもしろ家れ門のもるふ来るがうくるる

くる紙あるがれ将軍ぐうち寺社べ

遥見人家花便入不論貴賤與親疎

ぬく紙じけるふるるて入来まるくう物紙感る風情ぬ彩

採鴨忠信が大隅守うて下けるふ郷の引よ頭白義あり

くうを祭あるて歩んとるくうう寺もべ

むくるく寺社をいくけるるれくるんいえいるる

ふくるんてゆるされくうくるぬ来のくるれ妹背乃

中ともやいぐる蝶なるふるうて色ぬく新見紙花鳥の使

くすたあるうなるいまく貪き世紙ぬくるけくもすくも

乃くくう其徳高多くうくしく

(卅五)後撰集ふうくれんくう乃愛紙くくくていくう寺れべ

ぬくうのかくみれ神くはくて

はるくも沒ぬるの長生けくう紙ぬこふ心いるくう

くとく宋玉が潘安すくく女いる見ぬ紙ぬはでかの色うふ

くくくうくなくてやるくんくん

抑此ものは大和物語などにもいとこまかに侍るなり
すべて紙屋の紙彼文の書女の井てこみこの紙にかきそのう
みこの宮にまゐりてとかくふるみの袖うちはらひてなきて
ものしたまふ秋ものうきころ侍りけるに
来風絆物といふ物はいかなるものぞと女房屋紙
にかきてとかれば童男のかたちぬの袖うちはらひて
なきてものしたまふ紙男にこそかくあるべきものなるべ
とかくいひ侍れば不同ものがたりの中務の宮の親王と
桂親王と琴ひき給ひ多女五宮と碁打給ひしにいづ
れの事よりそなべ

寂蓮俗名中務少輔左長
ものがたり
ものよりもいとかなしきものは人のこころ
ものよりもあはれなるものは
なにはのあしの神の宮とはまことにいとかなしきものなり
伊勢物語には二条后のつかうまつる男ひとりくる女ありけり
とかいてよびにやりけるとかかるふみをもてゆきて物ぐに
をいかんとしてはかりなくものはかなき事すこしいふう
さんとらいとれば女いとくものぐさくものいはぬ物ぐさ
なりけるとかいてあり
いとかしこきはなさけなくあさましかりけるかなとあ
はれがりてものしたまふ
此ものがたりのうちにかくいひつづけたる後の事にて

河内重如をいと須臣判官代と呼ばれ其所の中業の
たり紙ようなる紙をとりてけさう文を書てもづう
ものをいたりう

人はそはらるもやすかるめとてまに我ら使よ我ら
ぬめでたてぶいまうり此人河内より夜ごとに住江よりて
衣をあらけるをいるてきとれるのこどもるもちぬとく
も行紙よるとるとうり

さるめとれく紙くは阿弥陀仏人ゆりかもぬ拾をうるを
和泉式部もづいて稲荷へ詣うり田中の明神乃ゑの程
もて河内しけるふいくぐきとぶ河うりとる童代

あ紙とうて拾紙をいてきてあるうりを向のかぐへくれり
をれば此あをとををけるをいく決の日或紙をの方と
見出てあるるに大さあるなり童代文をあてをずけ
ばあれい何とるものぞとうべ此文とあるを作りんくいひ
ゑけるをとる紙をとれば

河内をとるいるり此のりみらるあ紙見ちいるをさ
ゆを書ちうりう武紙あるれく拾みすいて此童に拾くの方へ
ことといてよび入りけるぞ
小野篁之卒の大臣にその拾紙をけるを文とりてもど
うけるうるとうや其詞ちう

才非馬郷弾琴未徒身異風史吹篇猶拙

大兵是をうんで感じて奪はれぬ
宇治入道殿うちうちさうなりとて
弘博はけさじうちつまりぬ

秋くれいつとなくかりかねの
入道殿きうを引く秀歌よい返事かくゆきて
はうはされる

中院内蔵家雅卿

家家大納言として神楽保馬楽うらいてゆきくかさ
びうる人れくきかたへ後白川法皇の女房右衛門佐と
ゆきうる家経中将うこをしてほふうまぐに成くさをざ

うとうひうれい

あうれなくいかなるこうんとおもひかまもあれううこ紙
やうるんてゆゆ秋くれい返事いちて東紙はううてもく
ううて年ぞあうちにうう

父徳貴定公息

近い徳大寺れ右のゆゆ歩まうをていいいおぐうれ女房の
もう人師子はうう紙作うう茶碗乃松をすうそうす
ゆうとれううて世奇とうれてうけれとうはうかうい紙
ううとうう

徒くいうれれ君よとうれよかうきわよいの松ありうも
女房世松い只よいあうぐとてうくうて世奇とうりあ出うれ

そうけうのみくいろくもてくるを色黒くもれを立紙入にて
ぬくいて出れらとあるいきるそうぎいも
奥選大百ぢ御見侯理古美すくゝ物こゝよゆるて清る
大ゝ家やゆさすゝ時ゝ物るゝい紙ゆしのゝをくうゝ絵てる
三河寺定墓出さし浦うけける女けくれくゝ浦よ市紙び
世紙うた物しゝ入てうけるふ長雨のぬてこうるゝさ相
かうゝ女りいそうゝゆゝまゝそうゝるゝ鏡とうまて来うゝる
を取くゝるふぬくゝ見ゝみゝようきゝをける
市ゝのゝこゝるゝし涙のゆゝをゆゝ見初ゝ新紙人ゝ浦な
見紙ゝるふ涙ゝぶゆゝび後をび返ゝてゝ浦ぐゝれゝわゝれゝを

そう道をたいらかにしてあるいは世事によりてなること出家のら寂照上人として入唐しまうかこうとい圓通大師ゆゑぐりけるに清涼山の禁ゑてはせ給ふるを射詩と化まう

[illegible]遠聽孤雲上聖衆来迎落日前へ

但此詩保胤朝臣ちうこと云ふ侍ひ或伝云此人い唐土に娑婆山寂照とつひうる重れ後身也師しく法門の義を論じて我い勝まうとおいて入滅ちうけるぐ其執よりて往生を遂ぐ日本にすれさうもまるか也入唐ちうそうれば娑婆山の寂照の報ふかりしあるがいざりもう也人はひとをもとめんさうそうれば偽て有もう御より頭よ之あるこれてはこうり

三縁ちうる法師の人はかりかうして物をくうふ東面に居ちう人いすちあざるもうう西面よある人い何ぐ物をうをそれべ

れをいをはじめて物のかりくれい西面を牧しうる方をは

とぼとあうけるうけらいいくあくれて物をんうをせうう

さてうやをようさうべきさきうかうもとぐくあるべわ

わどの身をれども藝能よつまてうを紙とげ雲紙うう

うの古今集を百和ちあるわやーのきづれあるをびくべは

までも郢曲よとぐし和歌ときのそ業よりた人ともうて

おさし撰集とけづと其ちあうしあまう閑ゆるゆうう

亭子帝ー鳥養院うて法遊方うふうちうひと云ふ

を人々とゝ侍るに秋のあそびとて和歌集まうもとに丹後守にて有よくうたひて数よりの物語とわるに丹後守
玉渕が女よ白女とゝ申す帝清涼殿のまへ玉渕が
詩哥にそくしなりし者也そのひとりあるべき所なし
べしけるに實と申すべきゆゑ申侍らるゝ和哥あく
ふるあり申しかの者にあつ殿のわるうる
此時帝かゝあれしを侍て清らぎこ重と侍りをきう
もとの上達部四位おのくきわわるぞそうづをけをば二
同ぞうにつゝあまりにうるもん同女源實はてゝまう
をけるゝ上侍りて別情をうるあるて

今ゝに今よりけ物語ハ何ゝ侍りうれ侍りうれ
ゝよりあるをけるはりゝ古今集にいはりもゝ中ゝ肥後國乃
住君松浦姫ハ後撰集ハ入神後拾遺集ハ女宮本ハ拾遺集とけ
ゝすゝ墓ハ傀儡名曳ハ詞花集紙ゆり江口遊女妙ハ新古
今の作者也女ハ白ゝ白ゝ主忠岑ハ舎人ゝ人ゝ古今の
撰者よはゝ人ゝ面ハ所ハ旅人みて同集紙けゝす言ゝ
ハ本長ゝれゝ侍ゝ
神樂者ゝ祈ゝ男ハ住ゝ住ゝ行ゝ海賊ゝ
あいてゝのまゝ和ゝ侍ゝ
我名何ゝ住ゝ侍ゝ人ゝ

今は西方極楽世界をこひねがふべし

やうやうくるしみて引入れんとする時西方に楽世界を願ふべし

さ雲とたれびさくるまんを見たまつりつゝ合掌をう

こひて往生紙をぬぎて解脱い何をつゞとそさてろ

れいくるに付て信仏教ことにしたがふべし

菅之信仏絵馬の初は迦毛郡の吉和徴のよしよりしろ

くれば舟いまつゞ法門業也今いかゝとゝろんは法紙一首作多へ

とゝつり真後は業ゞけ之程は極楽の荘厳ゝにうしい色冠冠

は未迎に彩り絵々る真様根をけうしてよ入れかくすろろよや